

集英社新書ヴィジュアル版

昭和百年への鎮魂

江成常夫のレンズがとらえた戦争

伊藤俊治

Ito Toshiharu

はじめに

「昭和史のかたち」を半世紀以上にわたり凝視し、写真の記録性の意味を深化させてきた写真家江成常夫の作品群は、世界が大きく変容し、「記録と創造」の力が切実に求められている現代においてその独自の輝きを増している。

「平成」や「令和」と年号は変わっても「昭和」はまだ生き続けている。昭和が続いていれば、2025年は昭和100年にあたり、太平洋戦争の敗戦から80年になる。日本を未曾有の混乱と悲劇に陥れる契機となった満洲事変は昭和6年（1931）、中国瀋陽（奉天）郊外で日本関東軍が南満洲鉄道の線路を爆破したことに端を発する日中間の武力闘争である。その戦いは、やがて清朝最後の皇帝溥儀を担ぎだした満洲国建設や日本人500万人の満洲移民計画を経て、太平洋戦争や第二次世界大戦へ連なる15年戦争となっていた。いや現実には見えない戦争は今も続いている、私たちは百年戦争の只中（ただなか）にいるのかもしれない。

江成常夫は、この昭和100年の流れを半生を費やし見つめ、戦争の昭和の軌跡を

正確に撮影してきた。歴史に埋もれた無名の人々が国策に翻弄される不条理を浮き彫りにした『花嫁のアメリカ』や『シャオハイの満洲』、戦争の痕跡が消えた現在を被写体として引き受け、風景となった記憶を透徹した眼差しで掬いあげる『ヒロシマ万象』、太平洋戦争で破壊し尽くされた玉碎の島々を訪ね、戦死者たちの霊魂を宥める『鬼哭の島』、沖縄戦の惨劇の場となったガマ（洞窟）の向こうの死者たちの沈黙の声に耳を澄ます写真展「GAMA/CAVE 霊魂がやどる聖地」等々、戦争花嫁、残留孤児、満洲残影、ヒロシマ、ナガサキ、被爆物、沖縄自決、玉碎の島々などの対象に焦点をあて、内なる衝動に駆られながら取材を重ね、写真と文章を相乗させたフォト・ノンフィクションの手法を活かし、記録と表現が拮抗する写真の力を切り拓いてきた。

「戦争の昭和」の時空を見つめてきた江成常夫の、消えゆく点と点を生きた線や面に変えてゆく独自の思考と実践は、戦後日本の隠れた構造を何よりも雄弁に物語ってくる。『花嫁のアメリカ 歳月の風景1978—1998』の論考執筆を契機に氏とは出会い、『いのちのかたち』の解説へ至るまで、四半世紀以上にわたり、鎮魂の意味を深く秘めた写真を追いつけてきた。その過程で、あらためてその全貌を明らかにしなくてはならないという思いに駆られてきた。戦争という有無を言わさぬ暴力を生む国家のメカニズムを見つめ、

日本人とは誰なのか、昭和とはどんな時代であり、その時代は今とどう繋^{つな}がっているのか、そうした問題群を、厳密な整合性の下に解き明かしてゆく。本書は昭和史全体を包括する稀有^{けう}な仕事を成し遂げてきた江成常夫の写真の本質を浮かびあがらせる論考集である。

目次

はじめに 3

第1章 鬼が哭く島 11

- 1 昭和100年の軌跡／2 地獄の島々／3 ガダルカナル島からテニアン島へ
- 4 レイテ島の鬼哭／5 硫黄島の魂魄／6 降伏ということ／7 敗戦の意味
- 8 ドイツの悔悟／9 靈魂の器

第2章 屍衣の襷／「GAMA/CAVE 靈魂がやどる聖地」 53

- 1 集団自決の場／2 修羅の洞窟／3 沖縄戦裁判の流れ
- 4 沖縄本島決戦の経過／5 ガマと非業の死／6 悪魔のオブジェ
- 7 内蔵された記憶／8 霊を包みこむ衣

第3章 まぼろし国・満洲 85

- 1 まぼろしの境界／2 日露戦争と日韓併合／3 王道楽土への道
- 4 満洲のユートピア・イメージの構築／5 満洲国の軌跡を巡る
- 6 軍部独裁と中国全土侵略／7 満蒙開拓団の現実／8 表現と記録の拮抗

第4章 共苦の思想／シャオハイの満洲 121

- 1 残留孤児の運命／2 国策と開拓植民／3 軍閥の専行
- 4 日本軍の変質／5 孤児たちの表情／6 地獄の凝視

第5章 時の家族／歲月の風景 151

- 1 花嫁のアメリカ／2 ウォー・ブライドの行方／3 生の体験に触れる

- 4 家族樹の広がり／5 振れた言語空間／6 語り部としての写真家
7 歴史の場への眼差し

第6章 漂泊する魂／生と死の時を見つめる

181

- 1 静寂の世界／2 裸の自己へ／3 原色の夢
4 解体と再生／5 生と死の間の糸を渡る

第7章 霊の流れる街／ヒロシマ万象

203

- 1 8月6日の眩暈／2 生きているヒロシマ／3 光のヴォイド
4 彷徨う霊／5 何も見ていない／6 私は決して忘れはしないだろう

第8章 霊性の宿りと証 225

- 1 被爆の証言／2 魂のアーカイブ／3 必然としての写真
- 4 鬼になる物質／5 回帰する霊

第9章 「いのちのかたち」を見る 251

- 1 命の庭／2 観想の試練／3 死生観の発露／4 心眼の道
- 5 霊性の目醒め／6 魂の行方／7 此岸と彼岸を繋ぐ

おわりに 280

江成常夫の年譜および主要写真集・著作 282

第1章 ^な鬼が哭く島



バンザイクリフの海 北マリアナ諸島サイパン島／2009.7

1 昭和100年の軌跡

2025年は昭和100年にあたり、太平洋戦争敗戦から80年という節目の年でもある。日本軍のハワイ真珠湾攻撃を口火とする太平洋戦争は1941年に始まったが、この戦争は日中戦争（1937—）に通じ、日中戦争は満洲事変（1931—1932）に端を発する。日中戦争は日本と蔣介石率いる国民党政権の中華民国の間で1937年から1945年まで戦われた。当時は「支那事変」が正式名称であり、戦争と称さなかったのは、太平洋戦争まで両国が宣戦布告をしなかったためである。日本と中国はアメリカの中立法発動による経済制裁を恐れ、ぎりぎりまで戦争と認めようとしなかった。しかも蔣介石は毛沢東率いる中国共産党との内戦（第一次国共内戦／1927—1937）も抱えていた。

日中戦争の契機となった1931年からの満洲事変は、満洲の総軍（戦域統括単位）関東軍による鉄道爆破事件（柳条湖事件）を発端とし、翌1932年に満洲国が樹立される。この建国は1933年の塘沽停戦協定により中国側から黙認され、一応の終結を見た。中国国民党は中国共産党との戦いを優先し、その後外国の侵略を防ぐという「安内攘外」を基本方針とする体制を組む格好となった。

一方、日本は1941年に南方作戦の下に陸軍総軍の南方軍を編成してマレー半島へ上陸する。同時に海軍はハワイ真珠湾を奇襲して米英に宣戦布告した。はじめは香港ホンコンの戦いやシンガポールの戦いで英軍を撃破し、蘭領東インド（現・インドネシア）でもオランダ軍を破り、ビルマ（現・ミャンマー）の戦いも連合軍に勝利してビルマ全土を制圧した。その勢いに乗じたフィリピン攻略戦ではダグラス・マッカーサー指揮の米軍をコレヒドール島要塞陥落を経て退散させている。

しかしこうした破竹の勢いは長く続かず、1942年の中頃から次第に太平洋島嶼部の制海・制空権を失い、日本全土が資源や食糧の不足に悩まされてゆく。そしてガダルカナル島の戦い、アッツ島の戦い、サイパンの戦い、グアムの戦い、ペリリュー島の戦い、硫黄島おうとうの戦いと、貧弱な補給すらも途絶え、地上部隊の壊滅や玉砕が相次いだ。1945年初頭からは日本本土も大規模空襲に晒さらされるようになり、継戦能力は失われ、国体（天皇制）消滅を恐れた日本政府は和平交渉を模索するが、もはや時遅しだった。

満洲事変に始まる15年戦争（アジア・太平洋戦争）は内外の膨大な人命を犠牲にし、未曾有の惨禍をもたらした。太平洋戦争による日本の犠牲者は300万人を超え、第二次世界大戦全体の死者は5000万人と言われる。江成常夫は半世紀以上にわたり、この負の



墜落戦死した日本兵の慰霊碑

米軍は真珠湾攻撃で戦死した日本兵を、軍葬で弔い、モニュメントを残している。 ハワイ州オアフ島／2005.6

昭和〃と対峙^{たいじ}し、戦争の経験と記憶をレンズを通し精緻に凝視し続けてきた。戦後まもなくアメリカに渡った戦争花嫁、満洲に取り残された日本人戦争孤児、敗戦をもたらしたヒロシマやナガサキの被爆者、戦禍の傷痕を刻んだ遺骨や遺品、沖縄戦の犠牲者が逃げこんだ洞窟の痕跡……多くの日本人が忘れ去り、その現実を記憶してはいない、今にも消え去りそうな経験を、明確に知覚可能なものとして現前させてきた。

さらに江成はこうした歴史への眼差しと文脈の整合性を積み重ねながら、かつての太平洋戦争の激戦地を祈るように撮り続けた『鬼哭の島』を2011年に完成させている。